

1920年代朝鮮の教育をめぐるナショナリズムと民主主義の関係

－申興雨 *The Rebirth of Korea* (1920) と J. E. Fisher, *Democracy and Mission Education in Korea* (1928) の比較を中心に－

北澤 愛

1. はじめに

1919年3月1日、天道教やキリスト教のリーダーが密かに作成した独立宣言書が京城（現ソウル）のパゴダ公園で読み上げられ、学生や民衆が「朝鮮独立万歳」を叫びながら街頭で示威行動を繰り広げた。この三一独立運動の発生と鎮圧の過程において、朝鮮人の立場からしても、日本政府・朝鮮総督府の側からしても重要であったのがアメリカの動向であった。独立宣言書が、第一次世界大戦のさなかにウィルソン米国大統領が提唱した民族自決主義の影響を受けていることはよく知られている。長田彰文の研究が明らかにしているように、第一次世界大戦後、アメリカは民主主義国家が構成する新たな国際政治体制（ワシントン体制）を構想するとともに従来の植民主義を批判し、「被統治者の同意による統治」を提唱した。こうした従来の植民主義への批判は、アメリカ国内の世論において朝鮮の自治・独立への共感も呼び起こしていた¹。他方で、日本による朝鮮統治は欧米列強の容認によって成立しているという側面もあり、日本は朝鮮統治にあたってアメリカ世論の影響を無視することができなかった。こうしたことから、帝国日本と朝鮮の関係について論じる場合、帝国日本―朝鮮―アメリカの三項関係を念頭においた分析を行わなければならない。教育問題についてもそのことはあてはまる。

朝鮮総督府が1911年に制定した第一次朝鮮教育令は朝鮮人向け学校の修業年限を短くして低レベルに抑えるものだったが、三一独立運動後の1922年に制定した第二次朝鮮教育令では内地延長主義の立場から在朝日本人向けの教育制度と朝鮮人向けの教育制度を部分的に統合した。厳しい言論統制は相変わらず継続していたので、朝鮮半島内でこの改革を根底から批判するような論を公表するのは困難であった。それだけに三一独立運動後に英文で刊行された教育論が着目される。朝鮮人や在朝アメリカ人宣教師が英文で刊行した書籍や英文で執筆した学位論文では検閲から比較的自由に自らの意見を表明しえたと考えられるからである。これらの書籍や論文がどのようにアメリカの世論に影響を与えたのかという問題は別に検討しなくてはならないものの、かりにそのような影響ルートを具体的に見出せなかったとしても、同時代の朝鮮植民地教育がどのような観点からなされようとしていたのかということは、それ自体として重要である。

現在、確認しうるかぎり、1920年代朝鮮の教育を主眼的にとりあげた英文書籍として、次のようなものをあげられる。

- ① Cynn, Hugh Hueng-wo, *The Rebirth of Korea: The Reawaking of the People, its Causes and the Outlook*, (New York, Abingdon Press, 1920)²
- ② Underwood, Horace Horton, *Modern Education in Korea*, (New York: International Press, 1926)
- ③ Fisher, James Earnest, *Democracy and Mission Education in Korea*, (New York: Bureau of Publications, Teachers College, Columbia University, 1928)
- ④ Auh, Paul C., *Education as an Instrument of National Assimilation: a Study of the Educational Policy of Japan in Korea*, (New York: Ph.D. dissertation, Teachers College, Columbia University, 1931)

①の著者である申興雨と④の著者である吳天錫は朝鮮人キリスト教徒、②の著者である H. H. アンダーウッドと③の著者である J. E. フィッシャーは在朝アメリカ人宣教師である。これらの人物は相互に個人的にも知り合いであり、④は①から③を参照、③は①と②を参照というように後続の書籍は先行する書籍を参照している。

筆者としては、これらの著作の中でも③のフィッシャーの著作が「民主主義」という観点から前面に出している点で興味深いと考えている。同時代の朝鮮教育を「民主主義」という観点から批判することは植民地支配に対する原理的な批判たりえたのだろうか、それとも「よりよい植民地支配」を正当化するための口実となったのだろうか。そもそもここで語られる「民主主義」とはどのような意味合いであり、キリスト教信仰や朝鮮ナショナリズムとどのような関係にあったのだろうか？この点を考察することは朝鮮総督府統治下の教育をめぐる問題点を浮き彫りにする上で重要であるのみならず、「民主主義」という価値を掲げるアメリカという新たなタイプの帝国のあり方を考察することになるだろう。さらに、解放後、申興雨が大韓民国の教育行政において重要な位置を占め、フィッシャーもその指導にあたることになることを考えれば、この作業は戦後韓国の教育問題を考える手がかりともなるはずである。そこで本稿では、①の申興雨の著作との関係もふまえつつ、③のフィッシャーの著作を中心的にとりあげることとする。

1910～20年代の朝鮮キリスト教史にかかわる代表的な先行研究として、李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代』があげられる。同書は改正私立学校規則施行や三一独立運動等を巡るキリスト教と朝鮮総督府の関係を考察した書であり、特に朝鮮の宣教事業をもっとも大規模に展開したアメリカ長老派の動向に着目している³。宣教師の側の資料と朝鮮人キリスト教徒側の資料の双方を幅広く目配りした研究として参考となるが、キリスト教史・宣教事業史という性格が強い。これに対して本稿では、教育学的視点も交えながらフィッシャーや申興雨が教育に対してどのような期待をかけ、どのようにこれを改革しようとしていたのかということに着目することとしたい。

2. フィッシャーと申興雨

第一節 フィッシャーの論文の背景

フィッシャーはアメリカ南メソジスト教会の宣教師である⁴。1911年にエモリー大学 (Emory and Henry college) に入学、卒業後フィリピンに渡り3年間の教育活動を終え、1914年から16年まで日本で英語教師を務めた。その間、長期休暇中に朝鮮を訪問し、メソジスト教会の R. A.

ハーディー (Robert Alexander Hardie) や長老教会の H. H. アンダーウッドなど朝鮮現地の宣教師およびメソジスト教会平信徒の申興雨ら朝鮮人キリスト教徒と交流した⁵。フィッシャーは申のことを「最も愛国的で忠実な朝鮮人 (a most patriotic and loyal Korean)」と評している⁶。その後、ニューヨークの聖書セミナー課程で1年間学び、コロンビア大学大学院へ進学、修士課程在学中に R. A. ハーディーの娘であるベシー・ハーディー (B. Hardie) と結婚した⁷。19年に心理学専攻で修士課程を修了、同年10月朝鮮に渡り延禧専門学校の教員に就任した。

延禧専門学校は H. G. アンダーウッドの設立した倣新学校大学部を前身として、1915年に長老派、メソジストなどの連合で設立した高等教育機関である。同校は朝鮮人男子に対する世俗教育も視野に入れており、非キリスト教徒の入学も認めていた。宣教師の認識としては朝鮮のミッションスクールのなかで最も水準の高い「キリスト教連合大学」であったが、朝鮮総督府の教育制度においては大学ではなく私立専門学校という位置づけを余儀なくされた。教員は宣教師と朝鮮人で構成されており、朝鮮人教員としてはマルクス経済学や漢学の専門家がいた。1919年の時点では文科、数学物理学科、神学科、商科、農業科、応用化学科が設置されており、フィッシャーは文科の心理学教授として招聘された。だが、他教科との兼ね合いにより H. H. アンダーウッドが心理学を教え、フィッシャーが教育学を担当することとなった⁸。

延禧専門学校については、文科の学科課程が専門化されておらず、朝鮮人の学生たちは研究・教育水準に満足していないという報告もなされている⁹。また、総督府は専門学校の教授の全体数の3分の2以上を中等教員養成課程の有資格者としてを要求していた。そのため、延禧専門学校では宣教師および朝鮮人教授を安息年 (サバティカル) にアメリカに留学させ、博士学位を取得することを奨励していた。上記の方針に基づき、フィッシャーは博士学位取得を目指して1925年にコロンビア大学ティーチャーズカレッジに入学し、1927年に博士論文を提出した¹⁰。こうした事実に着目するならば、フィッシャーは延禧専門学校において教育学担当の教授として自らの足場を固めるためにコロンビア大学ティーチャーズカレッジで学位論文を書いたと思われる。そこでフィッシャーはどのように朝鮮教育の問題点を把握し、またアメリカにおける教育研究を受容したのだろうか。

この問題を解明するにあたり着目すべきは、フィッシャーと申興雨の関係である。

第二節 申興雨にとっての「民主主義」と教育

1. 申の著書の背景

申興雨の *The Rebirth of Korea* は、1920年にアメリカのミッション委員会において宣教師に向けて行った三一独立運動に関する講演の内容を纏めて刊行したものである。目次は次のとおりである。

第一章 朝鮮の再生

第一節 歴史的な3月1日

第二節 扇動と抑圧

第三節 軍国主義に対峙するクリスチャン・ミッション

第二章 原因

第一節	日本の行政
第二節	日本の行政（続）
第三節	民主主義精神の台頭
第三章	結論
第一節	日本の政策と朝鮮
第二節	民主主義と朝鮮の未来

目次からわかるとおり、同書では三一独立運動前後における「民主主義精神の台頭（The Rise of Democratic spirit）」に着目している。申興雨が民主主義に「朝鮮の未来」の可能性を見出そうとした背景には、キリスト教への入信のほか、アメリカ留学経験があったと考えられる。申興雨は12歳でメソジスト派の設立した培材学堂に入学してキリスト教へ入信するとともに英語を習得し、培材学堂の講師を務め、開化派のリーダー徐戴弼から民主主義について学んだ¹¹。1903年から1910年までアメリカ南カリフォルニア大学に学び、修士課程を修了し帰国した。1911年に朝鮮人として初めて培材学堂の校長に就任した。

申は朝鮮のキリスト教雑誌 *Korea Mission Field*（1914年10月号）において北長老派の崇実学堂校長ベアードと、ミッションスクールのありかたに関する論争を展開した。主要な論題は「ソウルに新たに設置する学校は university にするか college にするか」と「キリスト教高等教育機関に非キリスト教学生を受け入れるか否か」であった。ベアードがキリスト教徒に限定した college の設立を優先すべきと論じたのに対して、申は、医師や法律家、技術者など、社会に影響力をもつキリスト教徒を輩出する必要があることや、朝鮮に高等教育を望む青年が学ぶ場所が不足していること理由に university の設置を希望した。また、非キリスト教徒の学生は入学後に改宗する場合が多いことや、人間の関心領域の多様性を受け入れ、教会外の青年に対しても福音を授けるべきであることを根拠に非キリスト教徒の受け入れを主張した¹²。

1915年に改正私立学校規則により教育課程内における宗教教育および宗教儀式を禁じられた際には、北長老派系の学校がたとえ各種学校となっても宗教教育・宗教儀式を継続する道を選んだのに対して、申は、宗教教育・儀式を守るために各種学校となることを選ぶよりも、正規の私立中等学校となる道を選んだ¹³。すなわち1916年に培材学堂の名称を培材高等普通学校に変更し、総督府の認可を得たのである。これはメソジスト教会全体の方針でもあった¹⁴。この方針は、朝鮮ミッション実行委員会議長であるシャープ（Charles E. Sharp）が改正私立学校規則の施行を受けて「宣教師は日本人の道具にも朝鮮人の道具にもならない」と主張したこととは対照的であった¹⁵。

以上のことから、申は宣教よりも朝鮮人青年の教育を重視していたことがわかる。申にとってキリスト教は信仰そのものよりも、朝鮮社会改良の手段という側面が強かったのではないかと考えられる。だが、培材学堂を高等普通学校とする選択は即時独立を求める民族主義者からの批判にさらされることになった¹⁶。

申は、三一独立運動における街頭行動にも参加しなかったようである。この運動においてキリスト教徒が天道教徒とともに果たした役割は大きく、キリスト教指導者の民族代表としての役割や、各地方におけるミッションスクールの学生たちの参加の意義は無視できないものであ

った。しかし、各地でのキリスト教徒の参加はあくまで個人的なもので、運動への参加はキリスト教会全体としての方針ではなかった。申が街頭行動には参加しなかった理由は、独立運動を起こすには未だ準備不足であると考えたためと伝記では説明されている¹⁷。

このように、申は朝鮮人の教育機会を拡大しようとする一方、その主張は政治的独立の是非という問題をペンディングするところがあった。では、申におけるナショナリズムと民主主義の実現とはどのような状態を指すのか。この点を次節で検討する。

2. 民族自決の前提としての民主主義

申興雨は三一独立運動の街頭行動には参加しなかったものの、独立運動に大いに心を動かされていた。申は著書の中で独立を求める呼び声の広がり、総督府による苛酷な弾圧を熱意のある筆致で描写している。例えば、第1章の冒頭は次のように始まる¹⁸。

「マンセー（万歳）！マンセー！マ・ン・セー！」朝鮮に万年を！ 朝鮮に万歳を！1919年3月1日午後2時、このような力強い叫びの中で、8年半にわたって「死して埋葬されて」いた朝鮮は「死から復活（*rose from the dead*）」したのである。この再生した朝鮮は、著者が10年前にその死について記した古い民族（*nation*）とは異なる、新しい民族なのである。

さらに街頭にあふれる人々の写真を掲載し、総督府の軍隊・警察による苛酷な鎮圧の様子も具体的に記している。ただし、申が重視したのは、総督府の暴力に対して「目には目を」というように対抗的暴力で抵抗することではなく、運動の展開にキリスト教の立場からの意味づけを与えることであった。先の引用にも示されているように、三一独立運動を死から復活へというキリスト教特有のメタファーで捉えながら、申は、「大正デモクラシー」下の日本を含む世界的な民主化の流れが「朝鮮人に理想を完全に実現するという最後のステップをもたらすだろう」¹⁹として、次のように主張した。「各集団の政治家の策略がどのようなものであれ、民主主義精神の勝利は確実であり、朝鮮はその勝利の分け前を得るだろう」²⁰。このように、申は世界的な民主化の流れにより、朝鮮の理想を実現することができると考えた。申のみならず、アメリカの掲げる民主主義精神を内面化した在米朝鮮人やアメリカ留学経験者たちは、民主主義の原理に照らして日本の朝鮮支配の後進性を浮かび上がらせようとしていた²¹。

申は1912年から1920年まで朝鮮YMCAの理事を務め、1920年から朝鮮YMCA総務に就任したが、上記のような民主主義への期待を大韓基督教青年会同盟（朝鮮YMCA）の刊行していた雑誌『青年』でも主張している²²。例えば、1921年の『青年』創刊号に掲載された「デモクラシーの意義」では民主主義国家について述べ、なかでもイギリスの代議制は民衆の願望に対し国会が責任を負う形であるため最も民主的な仕組みであり、朝鮮でも議会民主主義の実現のための民衆教育を実施しなければならないと主張した。そして「デモクラシーの基礎は民智であり、民智の根源は教育である。全国国民の男女を問わず教育が普及し、政治体制において民衆こそが国家の根本であることを自覚すれば、官僚は自然とその主義に順応するだろう」²³と述べた。

このように、申は民主主義的な政治体制への参加を目的として民衆に教育を普及すべきこと

を主張し、そのような観点から *The Rebirth of Korea* のなかで総督府の教育政策を批判した。批判の内容は、総督府の教育費支出が警察関連の支出と比較して少なすぎることや、朝鮮人の教育機会が在朝内地人と比べて少なすぎること、カリキュラムに占める「国語」（日本語）の比率が高すぎる、普通学校が基本的に4年制であり教育水準が低いことであった。さらに、裕福な者は日本内地へ子女を留学させることができるとしても、内地の学校とは教育年限が異なるために直接上級学校へ進学することができず、朝鮮での卒業資格が意味をなさない状態であることをも指摘した。つまり、培材学堂を高等普通学校に改組するという決断も、朝鮮人向けの学校の質の低さを改善することを優先すべきと考えていたためと解釈できる²⁴。

このように、申は、総督府の教育政策が制度化された差別構造を生み出す点を鋭く批判した。それは、民衆への教育普及を怠る点で民主主義とは対極にあるものであった。その一方で、申はミッションスクールが民主主義の普及に貢献したと高く評価していた。朝鮮におけるプロテスタントの学校設立は1880年代に始まる。申は、1886年にメソジスト宣教師のアペンゼラーにより設立された培材学堂や、スクラントン夫人が設立した梨花学堂が朝鮮人教育に大きな変化をもたらしたと述べた。また、培材学堂での徐載弼の講義が独立協会形成の基礎となり、1890年代に愛国心と民主主義を同時に浸透させたと論じている²⁵。つまり、申において培材学堂のように民主主義の観点において朝鮮教育に貢献するミッションスクールと、非民主的な制度を維持する総督府の教育政策という認識が申のなかにあったことが読み取れる。

こうした主張は日本の植民地支配からの即時独立という問題をペンディングにしたまま、さしあたっては植民地支配下での改革を求めたものとみることができる。ただし、たとえ独立とは明言しなくとも、朝鮮人の自己決定権について次のように語っていることが着目される²⁶。

朝鮮人が求める第一の、そして最も基礎的なものは自分自身の運命を決定する権利と力である。かつてわたしたちは国際社会のなかにいたが、現在は忘れられ、ほとんど消えかけている。わたしたちは忘れられたかもしれないが、完全に消えてはいない。現実の生命である精神は、そこにあるからである。困難は精神を無視することができないし、精神は時間に耐えることができる。人類の民主主義は前進しており、いずれはそれが人類の進歩を妨げることなく、全体の利益になることを誰もが認識する時が来るだろう。

このように、申が求めたものは「自分自身の運命を決定する権利」、すなわち、朝鮮人の自己決定権であった。さらに重要なことは、申が自己決定権の獲得を可能にするのは「民主主義の発展」であると考えていたことである。つまり、申において、民主主義は民族自決の前提として希求されていたのであり、独立という政治的課題と無縁というわけでもなかった。ただし、以下に見るとおり、独立という課題にはかならずしも収斂しない「社会的民主主義」²⁷を追求する側面もあった。

3. 家父長制からの解放

申において、民主主義は朝鮮社会の封建的家父長制度からの解放をも意味した。申は「キリスト教が民主主義の原則を促進したといわれるとき、それはキリスト教の教えを指し、民主主

義制度がキリスト教の慣習と密接に結びついているため、両者は不可分かつ区別できないということを意味する」²⁸と述べ、医療宣教師アレンが開設した病院である済生院の設置を次のように評価した²⁹。

クリスチャンの管理下にある近代的病院はどのような意味で民主化された機関であったのか。答えは簡単である。数世紀にわたる階級差別は、おそらくこの施設の診療所と手術室において最初の衝撃を受けた。また、女性の隔離をなくし、女性の平等な権利の要求につながる最初の穏やかな一歩がここに刻まれたとみてもよいだろう。すべての人は生まれながらにして平等であるという教義は、ここでは説教されたのではなく、実践された。

このように、申は宣教師の設立した近代的病院が朝鮮社会に民主化をもたらしたと主張したわけだが、ここでの民主化とは、女性や奴隷など、朝鮮社会において差別を受けていた人々が平等に扱われるようになったことを意味する。

さらに、申はキリスト教による民主化の影響が朝鮮の家庭にも及んだ点に着目し、朝鮮の家父長的な家族に対し、宣教師の提唱する「ロマンティックな家族」像が与える影響の大きさを指摘した³⁰。また、スクラントン夫人が開校した梨花学堂は、「祖先を敬い、客人をもてなすこと」のみに価値を感じていた朝鮮人女性たちを「生活をより良くするための知識に価値を見出す」よう導いたと述べた³¹。このように、申は政治的独立という問題には還元できない根源的な課題を見据えていた。

以上をまとめると、申興雨はキリスト教が朝鮮社会の民主化に及ぼした影響を高く評価し、世界的なデモクラシーの潮流を背景としてさらにこれを深化させることが重要だと考えていた。申において、キリスト教徒による独立運動とのかかわりや宣教師による教育機関の設立などは朝鮮の民主化とかかわるのみならず、民族自決の前提として要請される点において朝鮮ナショナリズムの目的とも一致していた。他方、申は、キリスト教のもたらす平等や近代的家庭像などの概念が朝鮮の民主化に貢献したと評価している。つまり、申において、民主主義/キリスト教/朝鮮ナショナリズムはこのように不可分に結びついていたといえる。

先述のとおり、フィッシャーは自らの博士論文において申興雨の著書を引用したばかりではなく、申の提起した「民主主義」という問題を論文のテーマに据えている。フィッシャーは、ミッションスクールの教育に対する申の大きな期待を受けとめつつ、そのあり方をどのように変革していくべきかということを、自らの取り組むべき課題として意識していたと考えられる。

3. フィッシャーにとっての「民主主義」と教育

第一節 「児童中心主義」「朝鮮中心主義」に基づいた教育

続いて、フィッシャーの博士論文をミッション教育と民主主義、朝鮮社会との関係という観点から考察する。

フィッシャーの博士論文の目次は次のとおりである。

I. 状況の概観および問題の概要

- II. 教育における民主主義の近代的概念
- III. 民主主義の観点からみた朝鮮ミッション教育の目的に対する批判
- IV. ミッション教育と朝鮮総督府の関係および総督府による教育統制
- V. ミッション教育と朝鮮人の政治的・経済的問題との関係
- VI. ミッション教育と朝鮮の在来文化との関係
- VII. 宣教師と朝鮮人教育者の個人的・社会的な調整をめぐる問題
- VIII. 朝鮮における知的リベラリズムと宗教的権威主義の間で増大する確執

論文の表題にも表れているように、同論文の目的は朝鮮におけるミッション教育の問題点を民主主義の観点からとらえ直し、改良することにあった。このような問題意識はどのようにして生じた原因として、まず申の著書から受けた影響を指摘しておきたい。

フィッシャーは、第一章の冒頭で申の *The Rebirth of Korea* に触れ、同書は「民族主義の興隆、朝鮮人の教育機会の要求、民主主義理念の広範な普及 (the rise of Nationalism, the demand for educational opportunities for Koreans, and the wide prevalence of democratic ideals)」について書かれたものであると記している。そして、「すべての政治的な騒擾はある程度収まったものの、教育と進歩への熱意はますます高まっている」ということを申の著書から学びつつ、さらに以下のように述べた³²。

朝鮮におけるミッション教育の歴史を一瞥すると、朝鮮人は初期のプロテスタント宣教師により教育に向けて行われた最初の努力をさほど評価していなかったという印象を受ける。…しかし近年では、そのような初期の態度は完全に変化し、朝鮮人は徐々にミッション教育を評価するようになった。彼らは今や学校のあるところに群がるようになった。このような態度の変化は、朝鮮人が「朝鮮の更生」と呼ばれる独立蜂起を起こした 1919 年まで非常に漸進的に起こった。この時に喚起された強烈な国家意識は、教育への熱意と要求として現れた。

このように、フィッシャーは申興雨の著作を通して、三一独立運動発生後における朝鮮人の教育要求の高まりと民主主義精神の広がりにも共感していた³³。そのうえで、民主主義と朝鮮ナショナリズムの関係について、ミッション教育に携わる立場から考察しようとしたのである。

さらに、フィッシャーの著書でとりわけ特徴的なのは、フィッシャーの学んだコロンビア大学ティーチャーズカレッジで教鞭をとっていたデューイ (J. Dewey) の議論の影響である。コロンビア大学には教育における児童中心主義を主張したデューイが所属しており、フィッシャーの指導教授はデューイの弟子であるキルパトリックであった。

フィッシャーはデューイの提唱する民主主義的教育の原理に基づいて、「教育の目的は人生についてより多くのことを知り、人生をより豊かにし、彼ら自身や他者がより満たされた生活を送れるようにすることであるべきだ」³⁴と述べている。また、教育の方法を決定するうえで最も重要なことは「学習者の個性を尊重することである (Respect for the personality of the learner)」と述べ、「すべての子どもはユニークな存在であり、彼らの完全な自己実現の達成を手助けすることは、親や教師、教育機関の義務であり特権である」と主張した³⁵。そして、そのような立場

からみれば、キリスト教の宣教を目的とした宗教教育もまた教育本来の意図からは外れるものと考え、「政治的または宗教的権威により、または完全な人間に関する理想的概念により設定された目的は、通常この原理に反するという点で非民主主義である」³⁶と主張した。

ここで、フィッシャーによりデューイの「児童中心主義」は「朝鮮人中心主義」に置き換えられていた。つまり、フィッシャーは朝鮮人の教育を子どもの教育に準え、子どもの教育が大人の定める目的に応じて訓練的に行われるべきでないのと同様に、朝鮮人の教育は朝鮮人自身の目的に沿って行われるべきであると考えたのである。だが、「朝鮮人中心主義」を重視するからといって「児童中心主義」という要素がなくなったわけでもない。朝鮮人たる子どもの自覚性を尊重するような教育の適切さを判断するための基準として打ち出したわけである。

フィッシャーは「朝鮮人中心主義」に基づいた教育を主張する北長老派宣教師のベアードの方針にも批判的であった。ベアードは日本の支配により朝鮮教会が脅威を受けつつある状況を意識しながら、それに対抗する手段として自給・自治・自宣を旨とするネビウス方式に基づき平壤の崇実学堂にて朝鮮語による土着教育の実施を主張した人物であるが、フィッシャーは、ベアードの方針が宗教教育を最も重視している点で民主主義理念に反していると主張した³⁷。

フィッシャーは続けて、植民地朝鮮の教育を批判的に考察している。総督府は三一独立運動後に長老派の宣教師への対策として、ミッションスクールへの規制を緩和した。すなわち、聖書教育を許可するとともに、1923年4月に指定校制度を施行し、私立各種学校としての地位にあるミッションスクールも上級学校への進学などの面で総督府の設立した公立中学校と同等の資格を得ることができるような救済措置をとった。抵抗を続けてきた長老派系の宣教師も指定校制度を重要な機会と捉え、指定校となって上級学校への進学資格を獲得することを目指した。

フィッシャーも同様に指定校制度を積極的に利用すべきと主張する一方、「総督府の提供する教育は朝鮮人の求める水準からは程遠く、「国語」としての日本語の授業がカリキュラムに占める割合が高い反面、朝鮮文化や朝鮮語の教育を軽視している」というように、総督府の教育政策が朝鮮文化や朝鮮語の教育を軽視している点を明確に批判した。それは「児童中心主義」と「朝鮮人中心主義」をリンクさせて捉えようとする姿勢から自然と帰結する見解であった。しかし、「日本の教育には本質的に民主主義的でない要素が多く存在するものの、民主主義精神は存在する」とも述べている³⁸。ここでどのような意味で民主主義的精神が存在すると述べたのかは不詳だが、「日本の教育」という書き方をしているので、同時代の日本で「大正自由教育」の風潮が広がり「児童中心主義」という思想も普及していたことに着目したとも考えられる。

このように、日本の教育が朝鮮語や朝鮮文化を無視しているとしながらも日本社会の今後の民主化に期待するという主張は申興雨の論とも共通していた。だが、フィッシャーの場合、朝鮮のミッションスクールの教育も西洋文化中心主義的であり、朝鮮人学生たちが自国の文化を無視するようになったと述べ、このような教育を非民主的であると批判している³⁹。フィッシャーは、ミッションの教育に比べれば、総督府の学校が提供する教育はむしろ朝鮮人のニーズを満たしているとも論じた⁴⁰。これは、総督府の設置した教育機関が十分な資金をもって設備を整え高学歴の教師を揃えるなど、全体としてミッションスクールよりも教育体制が充実していることを指していると考えられる。

だが、指定校化を巡る宣教師の努力は植民地体制への包摂を余儀なくされた。特に政治権力

との距離が近いソウルのミッションスクールは、総督府による規制を受け入れることで摩擦の回避を図らざるを得ず、学生募集の困難にも対応しなければならないという状況に陥った⁴¹。指定校化は宣教師にとり苦肉の策でもあったのである。

以上のように、フィッシャーは児童中心主義の立場から、政治的なものであれ、宗教的なものであれ、特定の目的による訓練式的教育を非民主主義的であるとして否定し、デューイの「児童中心主義」を「朝鮮人中心主義」に置き換えて理解した。フィッシャーはこのような立場から、ミッション教育も指定校化に対応して教育水準の向上を図らねばならないと主張した。また、申においては総督府の教育は徹底的に非民主的なものとして批判される一方、ミッションの教育は民主的だと肯定的に評価されたのに対して、フィッシャーはミッション教育に対してむしろ厳しい評価をしている。次になぜこのような見解が導かれるのかを検討しよう。

第二節 朝鮮ナショナリズムと民主主義

フィッシャーにおける民主主義教育とは、子どもがより豊かに人生を送ることができるように手助けを行うというものであった。そのため、教育内容は個人の内面からでる動機に基づいて決定され、生活に直接かかわるものでなければならなかった。フィッシャーはこのような「児童中心主義」的な思想を「朝鮮人中心主義」へと置き換え、総督府の学校でもミッションスクールでも、朝鮮文化や朝鮮語の教育時間を増やすべきであると主張した。

このように考えるフィッシャーは、総督府との距離の取り方にも細心の注意を払っていた。すなわち、植民地という限定的な状況において、宣教師が「総督府によって制限された分野に立ち入るべきでない」⁴²と述べた。だが、フィッシャーはそれを前提としつつ、ミッションの宣教方針を朝鮮人に率直に示すことで、宣教師と朝鮮人民族主義者の間に民主的関係を築くべきだとも論じている。さらに、「筆者は決して、中立的または「すべての人を満足させようとする」政策を支持しているわけではなく、非常に積極的な行動計画を支持しており、それによって朝鮮人のために最大限努力することができると考えている……どの土地であるかを問わず、民主的教育の成功によってこそ、ナショナリズムの真の価値が実現されるのだ」⁴³と主張した。

ここで「ナショナリズムの真の価値」と述べる際の「ナショナリズム」とは、文脈から考えて朝鮮人のナショナリズムを念頭に置いていると判断できる。つまり、フィッシャーは民主主義教育が朝鮮ナショナリズムと互いに支え合う関係を想定していたのである。

このようなフィッシャーのリベラリストとしての態度は、延禧専門学校での学生に対する言動にもあらわれている。1920年代の朝鮮ではキリスト教に対する批判とともに社会主義思想の広まりがみられ、延禧専門学校の学生らもその影響を受けていた⁴⁴。このような状況で、フィッシャーは中国で発生した反キリスト教運動に着目し、中国で発生した事態が朝鮮でも起こりつつあると主張した。そのうえで、「共産主義、無神論、無政府主義、自由恋愛、その他の朝鮮の若者が興味を持っている問題や、彼らとミッションと教会指導者の間の大部分の摩擦の基礎となっている問題に関する主題に関する公開討論は、雰囲気改善し、二つの集団間のよりよい仕事上の関係をもたらすのに役立つだろう」⁴⁵と述べた。

フィッシャーは1928年ごろ、延禧専門学校で自身の教え子たちが設けた討論会に参加し、人間の諸問題、社会、経済、宗教、教育、経済などの幅広い問題について議論したという。この

議論は英語で行われたというのが、フィッシャーは、そこで話した内容を総督府が聞けば逮捕されたかもしれないと回想している⁴⁶。このように、生活の問題から政治的思想的な話題まで、朝鮮の若者と議論しようとする姿勢は、リベラリストとしてのフィッシャーの姿勢をよく表しているといえるだろう。この場合のリベラリズムとは、第一義的にはキリスト教原理主義的な立場に批判的な距離をとることであったが、総督府から逮捕されるかもしれない議論を学生としていたことは、政治的なリベラリズムにも連なりうるものであったことを示している。

以上のように、フィッシャーは自ら宣教師でありながら、ミッション教育に対して批判的視線を向けていた。さらに、キリスト教が体现する西洋文化に朝鮮人が感化される危険性すらも指摘した⁴⁷。だが、このような態度は保守的な宣教師からの批判を免れなかった。延禧専門学校の校長であるエビソンのもとには、フィッシャーの著書を読んだ保守的宣教師から、フィッシャーの解任を要求する手紙がたくさん届いたとフィッシャーの伝記には記されている⁴⁸。

6. まとめにかえて

本論文は、植民地下朝鮮において社会福音主義的立場から朝鮮社会および教育の民主化を図ろうとした申興雨と、アメリカ人宣教師としてミッション教育の問題点を批判したフィッシャーの著作の比較考察を試みた。

申興雨は、1920年にアメリカで出版した *The Rebirth of Korea* のなかで三一独立運動の意義を強調する一方、民主主義精神の台頭が朝鮮ナショナリズムの実現を達成すると主張した。申における民主主義とは朝鮮ナショナリズムの実現のために自己決定権を獲得する前提であるとともに、政治参加を可能にするため朝鮮人に教育の機会を与えることでもあった。のみならず、男女平等の精神やクリスチャン・ホームに象徴される愛情に満ちた家族像を朝鮮社会にもたらした点で、宣教師の民主化への貢献を評価した。そのため、申において民主主義/キリスト教/朝鮮ナショナリズムの三者は密接に結びついていた。申はこれらの理念を重視しつつ、ミッションスクールである培材学堂を拡張し、より多くの朝鮮人に高等教育の機会を与えようとした。

他方、フィッシャーは1927年にコロンビア大学ティーチャーズカレッジに提出した *Democracy and Mission Education in Korea* において、民主主義の理念に基づいてミッション教育の問題点を指摘した。フィッシャーはデューイの児童中心主義の影響を受け、教育の目的は自己の内的な要求に基づくものであるとともに、生活に直接かかわるものであるべきだと主張した。そのため、宗教的あるいは政治的権威による目的に基づく教育を非民主主義的であるという理由で否定し、朝鮮人の教育は朝鮮人のものでなければならないと考えた。その意味で、教育政策において朝鮮文化や朝鮮語を重視しない総督府の態度を批判するのみならず、ミッション教育においても西洋文化中心主義が横行していると主張した。また、宣教師の教育活動が総督府の理解を得ることを前提としつつ、朝鮮ナショナリズム実現による民主的教育の達成をも主張した。朝鮮ナショナリズムに対するこのような共感、申の影響によるところが大きかったのではないだろうか。

だが、朝鮮の政治的独立をペンディングする申の態度は朝鮮社会からの批判を免れなかった。また、フィッシャーの主張は、日本の教育にも民主主義的精神があると評価するところがあった。なによりも独立を優先すべきという朝鮮人民族主義者の立場からは、フィッシャーの主張

も曖昧で、妥協的と見たことであろう。確かに、帝国日本の支配下での民主的教育の実施には限界があった。だが、彼らは現実に朝鮮人学生たちが直面している教育的差別の問題に自ら向き合うような実践こそが、朝鮮人の主体性あるいは自己決定権の獲得という目標の達成に繋がると考えていた。彼らが独立という形式以上に主体性の獲得にこだわり、朝鮮社会および教育の民主化を目指すという目的を主張したことの意義は、過小評価してはならないだろう。

註

- ¹ 長田彰文『日本の朝鮮統治と国際関係—朝鮮独立運動とアメリカ 1910-1922』(東京・平凡社、2005年) 71-72頁。
- ² 申興雨の著書の表紙に出版地はロンドンと記されているが、申興雨の伝記『인간 신흥우 (人間申興雨)』によれば、本書は1920年4月にニューヨークで出版されるや大きな反響を呼び、翌年6月に再版されたとある。この伝記に同書はアメリカのみならず英国でも反響があったとあることから、ニューヨークとロンドンの両方で出版された可能性もある。전택부 (チョン・テクブ) 『인간 신흥우 (人間申興雨)』(ソウル・ホンソン社、2021年) 131頁、407頁。
- ³ 李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代—ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』(東京・社会評論社、2006年) 109頁。
- ⁴ フィッシャーに関する先行研究には이윤미 (イ・ユンミ) 「1920년대말 미국남감리교회선교사가 본 신민지조선 미선교육과 민주주의 (1920年代末アメリカ南監理教会宣教師からみた植民地朝鮮におけるミッション教育と民主主義) James Ernest Fisher, *Democracy and Mission Education in Korea*, Seoul: Yonsei University Press, 1970 (原著: Columbia University Press, 1928)」(『韓國教育史学』第34巻第1号、2012年) と황금중 (ファン・グムジュン) 「*Democracy and Mission Education in Korea*(1928)를 통해서 본 피셔 (J.E. Fisher) 의 민주주의교육철학과 조선미선교육 인식 (*Democracy and Mission Education in Korea* (1928)を通してみるフィッシャー (J. E. Fisher) の民主主義教育哲学と朝鮮ミッション教育認識)」(『東方学志』第174巻、2016年)がある。これらはいずれも重要な研究であるものの、フィッシャーが「民主主義」を強調したことの意味を的確にとらえているとはいえない。
- ⁵ Fisher, James Earnest, *Pioneers of Modern Korea*, (Seoul, The Christian Literature Society of Korea, 1977) pp. 305-306.
- ⁶ Ibid., pp.83-92.
- ⁷ Ibid., pp. 301-313.
- ⁸ 延禧専門学校は開設当初、文科、数学物理学科、商科のみを設置していた。1916年に神学科、農業科、応用化学科が追加されたが、1921年から文科、商科、数学科のみ運営された。1923年からは文科、神学科、商科のみが新教育令による設置認可を受けた。
- ⁹ 延世大学校国学研究院延世学風研究所編『延禧専門学校運営報告書(1915-1942)』(ソウル・ソンイン、2021年) 200頁、206頁。
- ¹⁰ 1927年には、フィッシャーの同僚であるベッカーと李源喆がミシガン大学大学院、白樂濬もイェール大学大学院に在籍しており、3人とも1928年に延禧専門学校に戻っている(同前、334頁)。
- ¹¹ 前掲전택부 (チョン・テクブ) 『인간 신흥우 (人間申興雨)』 44-45頁。
- ¹² 전선이 (チョン・ソニ) 「1910년대 기독교계 고등교육의 특성—승실과 연희전문을 중심으로— (1910年代キリスト教界高等教育の特性—崇実と延禧専門を中心に—)」『教育史学研究』第19巻2号、2009、92-97頁。
- ¹³ 前掲李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代—ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』 110頁。
- ¹⁴ Methodist Episcopal Church, *Minutes of the Korea annual conference of the Methodist Episcopal Church*, Seoul, 1916, pp. 40-41.
- ¹⁵ 同前、108頁。
- ¹⁶ 前掲전택부 (チョン・テクブ) 『인간 신흥우 (人間申興雨)』 107頁。
- ¹⁷ 前掲전택부 (チョン・テクブ) 『인간 신흥우 (人間申興雨)』 125頁。キリスト教徒の中には教理上の理由などから三一独立運動に参加しなかった者がいることも指摘されている(澤正彦『未完キリスト教史』東京・日本基督教団出版局、1991年、151頁)。
- ¹⁸ Cynn, Hugh Hueng-wo, *The Rebirth of Korea: The Reawaking of the People, its Causes and the Outlook*, (New York, Abingdon Press, 1920) p.15.
- ¹⁹ Ibid., pp. 186-187.

- ²⁰ Ibid., p. 187.
- ²¹ 前掲李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代—ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』205頁。
- ²² 朝鮮YMCAの機関誌である『青年』は1921年から1940年までソウルで発行された。『青年』はすべて朝鮮語であり、朝鮮人のキリスト教徒たる青年を読者として想定していた。これに対し、申興雨がアメリカで出版した *The Rebirth of Korea*(1920)はアメリカの宣教師に向けて行った講演を元に書かれた本であるため、両者の記述内容は微妙に異なる。
- ²³ 申興雨「데모크라시의 의미 (デモクラシーの意義)」(『青年』創刊号、1921年)
- ²⁴ Cynn, Hugh Hueng-wo, *The Rebirth of Korea*, pp. 99-114.
- ²⁵ Ibid., pp. 134-135.
- ²⁶ 前掲に所収의 선택부 (チョン・テクブ) 『인간 신흥우 (人間申興雨)』“Korea asks right to determine own future” speech by Dr. Cynn, At Institute of Pacific Relations., Honolulu Star- Bulletin on July, 1925, 364頁。
- ²⁷ キム・クォンジョンは、申が政治的独立よりも現実的に機会の平等や生活改善等を目指す「社会的民主主義」を志向したと主張した(キム・クォンジョン(김권정)「1920-30年代基督教界의 民主主義認識 (1920-30년대 기독교계의 민주주의 인식)」『韓國民族運動史研究』第81号、2014年、228頁)。
- ²⁸ Cynn, Hugh Hueng-wo, *The Rebirth of Korea*, p. 129.
- ²⁹ Ibid., pp. 131-132.
- ³⁰ Ibid., pp. 132-133.
- ³¹ Ibid., pp. 136-137.
- ³² Fisher, James Earnest, *Democracy and Mission Education in Korea*, (New York: Bureau of Publications, Teachers College, Columbia University, 1928), p. 5-6.
- ³³ Ibid., p. 16.
- ³⁴ Fisher, James Earnest, *Democracy and Mission Education in Korea*, p. 17.
- ³⁵ Ibid., p. 25.
- ³⁶ Ibid., p. 19.
- ³⁷ 前掲李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代—ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』58-78頁；Fisher, James Earnest, *Democracy and Mission Education in Korea*, p. 42.
- ³⁸ Ibid., p. 83.
- ³⁹ Ibid., p. 126.
- ⁴⁰ Ibid., pp. 68-72.
- ⁴¹ 前掲李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代—ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』144頁。
- ⁴² Ibid., p. 101.
- ⁴³ Ibid., pp. 102-103.
- ⁴⁴ 홍성표 (ホン・ソンピョ)「기독교학교 학생들의 민족운동의 민족운동과 사회주의-연희전문학교 학생회를 중심으로- (基督教学校学生たちの民族運動と社会主義—延禧專門学校学生会を中心に—)」(『韓國獨立運動史研究』第68輯、2019年) 193頁。
- ⁴⁵ Fisher, James Earnest, *Democracy and Mission Education in Korea*, p. 182.
- ⁴⁶ 同会は“Good Life Society”と名付けられ、月に一度、レストランや学生の家などで開かれたという。Fisher, James Earnest, *Pioneers of Modern Korea*, p. 180-181.
- ⁴⁷ Ibid., p. 17.
- ⁴⁸ Ibid., pp. 57-59.

(教育哲学・教育史学コース 博士後期課程2回生)
(受稿 2023年8月31日、改稿 2023年11月20日、受理 2023年12月21日)

1920年代朝鮮の教育をめぐるナショナリズムと民主主義の関係

－申興雨 *The Rebirth of Korea* (1920) と J. E. Fisher, *Democracy and Mission Education in Korea* (1928) の比較を中心に－

北澤 愛

本論文では、申興雨の *The Rebirth of Korea* と J. E. フィッシャーの *Democracy and Mission Education in Korea* を比較し、両者の主張する民主主義と朝鮮ナショナリズム、そしてキリスト教の関係について考察した。申興雨は同書のなかで、三一独立運動以後の朝鮮における教育を通じた民主主義の実現および朝鮮ナショナリズムの勝利を目指すことを主張した。他方、フィッシャーは総督府の教育政策を批判しながらも、同時にミッション教育の非民主的な面を批判、政治的な目的や宗教的な目的に左右されない「児童中心主義」「朝鮮人中心主義」の重要性を主張した。申とフィッシャーの主張は政治的独立をペンディングするものではあったが、申が家父長制的家族の変革を民主主義の課題の一部とみなしていた点や、フィッシャーが社会主義などについて自由な議論を求めた点に着目するならば、民主主義を担いうる主体性の獲得を目指した彼らの主張は政治的独立には還元できない問題の広がりを見据えていたと評価できる。

The Relation between Nationalism and Democracy Concerning Education in Korea in the 1920's:

**With Focus on Comparing Cynn, Hugh Hueng-wo's *The Rebirth of Korea* (1920)
and J. E. Fisher's *Democracy and Mission Education in Korea* (1928)**

KITAZAWA Ai

This paper presents a comparison of Cynn, Hugh Hueng-wo's *The Rebirth of Korea* (1920) and J.E. Fisher's *Democracy and Education in Korea* (1928), and examines the relations between democracy, Korean nationalism, and Christianity posited by both authors. After the March First Movement, in *The Rebirth of Korea*, Cynn argued for the realization of democracy through education, aiming for the triumph of Korean nationalism. On the other hand, while Fisher criticized the colonial government's educational policies, he also criticized the undemocratic aspects of mission education. He advocated for the importance of "child-centeredness" and "Korean-centeredness," which should not be influenced by political or religious purposes. Although their assertions reserved the right to gain Korean political independence, if we focus on the point that Cynn highlighted the transformation of the authoritarian family system as a part of the democratic agenda and Fisher's emphasis on seeking open discussions about ideologies, such as socialism, their advocacy aimed at acquiring independence capable of sustaining democracy as anticipating the broader complexities beyond mere political independence.

キーワード：植民地朝鮮、アメリカ人宣教師、民主主義、朝鮮ナショナリズム

Keywords: Colonial Korea, American missionaries, Democracy, Korean nationalism